

紀要

第 22 号

2009.3

財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県出土の土器記号文について —弥生時代～古墳時代前期を中心として—

坂 下 実

1. はじめに

筆者は、平成18年度に栗東市十里遺跡の整理調査を担当し、出土遺物を実測している際に、弥生時代後期から庄内期にかけての土器中に、竹管状工具やヘラ状工具による刺突が単独で施されている土器を6点看取した。施文されていた文様は、円形竹管文・円形竹管浮文・刺突文の組み合わせによるもので、記号文であると判断した。滋賀県出土の記号文については、『考古学雑誌』で絵画・記号文土器に関する特集の際に、林博通によって24例が集成されている⁽¹⁾。また、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『特別展 弥生人のメッセージ 絵画と記号』においても追加資料が集成されている⁽²⁾。しかし、その後は集成されることなく現在に至っており、20年近くが経過している状態であるため、これを機に再び集成することとした。

記号文を集成するにあたって装飾・絵画・記号それぞれの定義は、橋本裕行によって「文様は抽象的表現の連続、絵画は物事の具体的表現、記号は一定の内容を持つ抽象化された単独の符号となる」と的確に説明されており⁽³⁾、それに従って集成していく。ただし、装飾と記号文は、竹管文や円形浮文のように同じ技法を用いて施される場合があり判断する際に注意が必要で、「小片のため、文様と記号文との区別が付かないもの」や「竹管文や円形浮文のうち、一ヵ所に施されず器壁を一周し、明らかに装飾であると思われるもの」、「一周はしないが、文様の配置に一定のパターンがみられるもの」は集成から除外した。今回は、資料の集成のみとなつたため考察などは次の機会に行いたい。

2. 研究史

記号文と絵画土器は、佐原真によって総論とも言える論文が書かれている。記号文については、①出土する時期、②分布する地域、③記号文の成立と波及、④記号文が何らかの意味を持っており、原始文字的な性格をになっていたであろうことが論述されている⁽⁴⁾。

また、藤田三郎は、記号文の性格を以下のようにまとめている。①記号文は弥生時代前期から古墳時代前期頃まで続くが、弥生時代前・中期と後期の間に、その量、形式から大きな画期をみせる。②記号文は文様から記号化されたが、中期後半の絵画土器の出現により両者が組み合わされ、その性格が変化した。③後期になって「記号文」記号体系として整った。並列的構図を持つ絵画・「記号文」は二元的世界観を表現している。④「記号文」の描かれた土器は水壺的性格を有し、それらは農耕祭祀の場で用いられた後、村はずれの土坑や溝に廃棄された。⑤畿内以外の地

域では、「記号文」土器は葬送儀礼の場で用いられる事もあったが、それも生と死という二元的世界観に合致する。⑥記号文の分布圏内にあっては、記号を通して共通認識が存在した。したがって、「記号文」は、単に装飾効果を附加するためのものではなく記号としての位置づけが必要だと総括した⁽⁵⁾。

その後、1986年には、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『特別展 弥生人のメッセージ 絵画と記号』により、絵画土器と記号文についての特集が組まれ、増加した資料の集成が行われている⁽⁶⁾。

3. 滋賀県下出土の記号文

出土遺跡 今回集成した滋賀県出土の記号文・絵画土器は、21遺跡81点を数える。遺跡毎に見ると、伊勢遺跡2点、石田遺跡15点、奥松戸遺跡1点、北大津遺跡6点、久野部遺跡2点、丁野遺跡1点、滋賀里遺跡1点、下長遺跡11点、十里町遺跡3点、十里遺跡6点、正伝寺南遺跡6点、八ノ坪遺跡1点、中北遺跡1点、中兵庫遺跡2点、服部遺跡8点、針江北・針江川北遺跡3点、針江中遺跡・針江南遺跡1点、吉武城遺跡1点、播磨田東遺跡1点、南市東遺跡7点、宮ノ前遺跡1点、柳遺跡1点である。出土遺跡、年代、出土遺構、器形、施文部位、施文工具、記号模式図は表1に、出土遺跡は図1にまとめた。

分布状況 第I様式から第III様式までは、土器記号文自体の出土点数が少なく散発的な状況が見て取れる。また、土器記号文が盛行する第IV様式から第V様式にかけては、湖北では針江北・針江川北遺跡、湖南では柳遺跡、下長遺跡のように遺構が密集している遺跡に多く出土し、集落の中心から離れて遺構密度の薄い周辺部の遺構では出土数が少ない傾向がある。

ヘラ書き・ヘラ押圧、竹管状工具、円形浮文による施文が見られる。確認できた最古の事例は第II様式。第IV様式から徐々に増加し、第V様式に出土数が急激に増加する。佐原真は、伊丹市史において第V様式の畿内の記号文を集成している⁽⁷⁾。畿内には絵画も多く検出されているが、記号の施文パターンは滋賀県出土の例とほぼ同様である。

器形と施文部位 今回の集成で記号文が施文された器形は、壺・甕・高杯・器台で、量的には圧倒的に壺が多く、甕と高杯・器台の例は非常に少ない。壺と甕の施文部位は似通っており、肩部が最も多く、ついで体部上半、底部となる。最も少ないので口縁部への施文であるが、第II様式では3点のうち2点が口縁部内面に施文し、もっとも盛行する第V様式には一点も見られない。高杯は裾部及び裾部

内面に施文する例が1点ずつ見られた。

出土遺構 記号文を持つ土器が出土した遺構は、堅穴住居、溝・河川・環濠、井戸、土坑、方形周溝墓、包含層がある。出土した点数と遺構を分類し表にまとめた（表2）。

様相 今回の集成で得られた情報を箇条書きにすると以下のようになる。

①記号文を持つ土器が出土する遺跡は各地域の中心的集落に集中している。中心周辺のムラでの出土量は極端に減少する。

②滋賀県では、記号文を持つ土器の所属に対して絵画土器の出土量が少ない。

③施文器具には籠状工具と竹管状工具、ハケが見られ、円形浮文も多用される。

④記号文の最も古い例は第Ⅱ様式で第Ⅲ様式にはみられず、第Ⅳ様式より増加し第Ⅴ様式で最盛期を迎える。古墳時代前期になると出土量が極端に減少する。

4.まとめ

今回の記号文集成では、自分の力不足もあり資料をただ集めるのみとなってしまった。土器の図版および分析と考察は次の機会としたい。

滋賀県出土の記号文出土時期、出土遺構は畿内の様相と一致しており、これまでの研究成果とほぼ変わらない。今回資料を収集している際に気付いた事に、下長遺跡の流路から出土した器台のように、4方向に開けられたスカシ孔のうち一方向のみに三角状に円形スカシ孔を3つ配置した物が見られた（図2）。これは特殊な例で、1点しか見られなかつたが、第Ⅴ様式の竹管文と円形浮文を使用する記号の配列と共に伴土器の高杯・器台のスカシ孔に共通する配列を持つものがあり、両者に同一の意味を持たせるような関係があるのではないかと思える。今後は、記号文の分析を行うとともに、スカシ孔にも注目して資料を集めていきたい。

(さかしたみのる)

註

- (1) 林 博通「滋賀県における弥生土器に施された絵画・記号的图形」『考古学雑誌』67-1 1981
- (2) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『特別展 弥生人のメッセージ 絵画と記号』1980
- (3) 橋本裕行「東日本弥生絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集』第八 1988 吉川弘文館
- (4) 佐原 真「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』66-1 1980
- (5) 藤田三郎「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社考古学シリーズ I 1982
- (6) 前掲(2)
- (7) 佐原 真「長頸壺と記号ふうの文様」『伊丹市史 第一巻』1971

引用文献

- 伊勢遺跡（守山市伊勢町）
『守山市文化財調査報告書第12冊』1983 守山市教委
石田遺跡（東近江市林・山路）
『石田遺跡』2005 能登川町教委
奥松戸遺跡（米原市奥松戸）
『奥松戸遺跡』1989 県教委・県協会
北大津遺跡（大津市錦織町）
中西常雄『北大津の変貌』1980
森前遺跡・国友遺跡（長浜市国友町）
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV-1』1988 県教委・県協会
久野部遺跡（野洲市久野部）
『久野部遺跡発掘調査報告書-七ノ坪地区-』1977 県教委・県協会
滋賀里遺跡（大津市見世1丁目ほか）
『湖西線関係発掘調査報告書』1973 県教委
下長遺跡（守山市古高町ほか）
『下長遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1993 守山市教委
『下長遺跡発掘調査報告書V』1995 守山市教委
十里遺跡（栗東市十里町）
平成21年度に県教委・県協会より報告書刊行予定
正伝寺南遺跡（高島市新旭町針江）
『正伝寺南遺跡』1990 県教委・県協会
八ノ坪遺跡（守山市播磨田町）
『八ノ坪遺跡発掘調査報告書』1997 守山市教委
中北遺跡（野洲市中北）
『中北遺跡発掘調査報告書』1991 県教委・県協会
中兵庫遺跡（草津市木川町）
『中兵庫遺跡』1997 県教委・県協会
服部遺跡（守山市服部町）
『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1986 県教委・県協会・守山市教委
針江北遺跡・針江川北遺跡（高島市新旭町針江）
『針江北遺跡・針江川北遺跡(I)』1992 県教委・県協会
『針江川北(I)遺跡・吉武城遺跡』1993 県教委・県協会
針江中遺跡・針江南遺跡（高島市新旭町針江）
『針江中遺跡・針江南遺跡』1991 県教委・県協会
吉武城遺跡（高島市新旭町旭）
『針江川北(II)遺跡・吉武城遺跡』1993 県教委・県協会
播磨田東遺跡（守山市播磨田町）
『播磨田東遺跡発掘調査報告書』1984 守山市教委
南市東遺跡（高島市安曇川町末広1丁目他）
『南市東遺跡発掘調査概報』1979 安曇川町教委
『南市東遺跡発掘調査概報』1980 安曇川町教委
前掲註(1)文献
宮の前遺跡（米原市能登瀬）
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-5』1988 県教委・県協会
柳遺跡（草津市青地町他）
『柳遺跡I・下戸刈遺跡』2004 県教委・県協会
『柳遺跡IV』2008 県教委・県協会

『柳遺跡発掘調査報告書Ⅱ』2008 草津市教委

丁野遺跡（湖北町丁野）

『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1976 県教委・県協会

※県教委：滋賀県教育委員会

県協会：財団法人滋賀県文化財保存協会

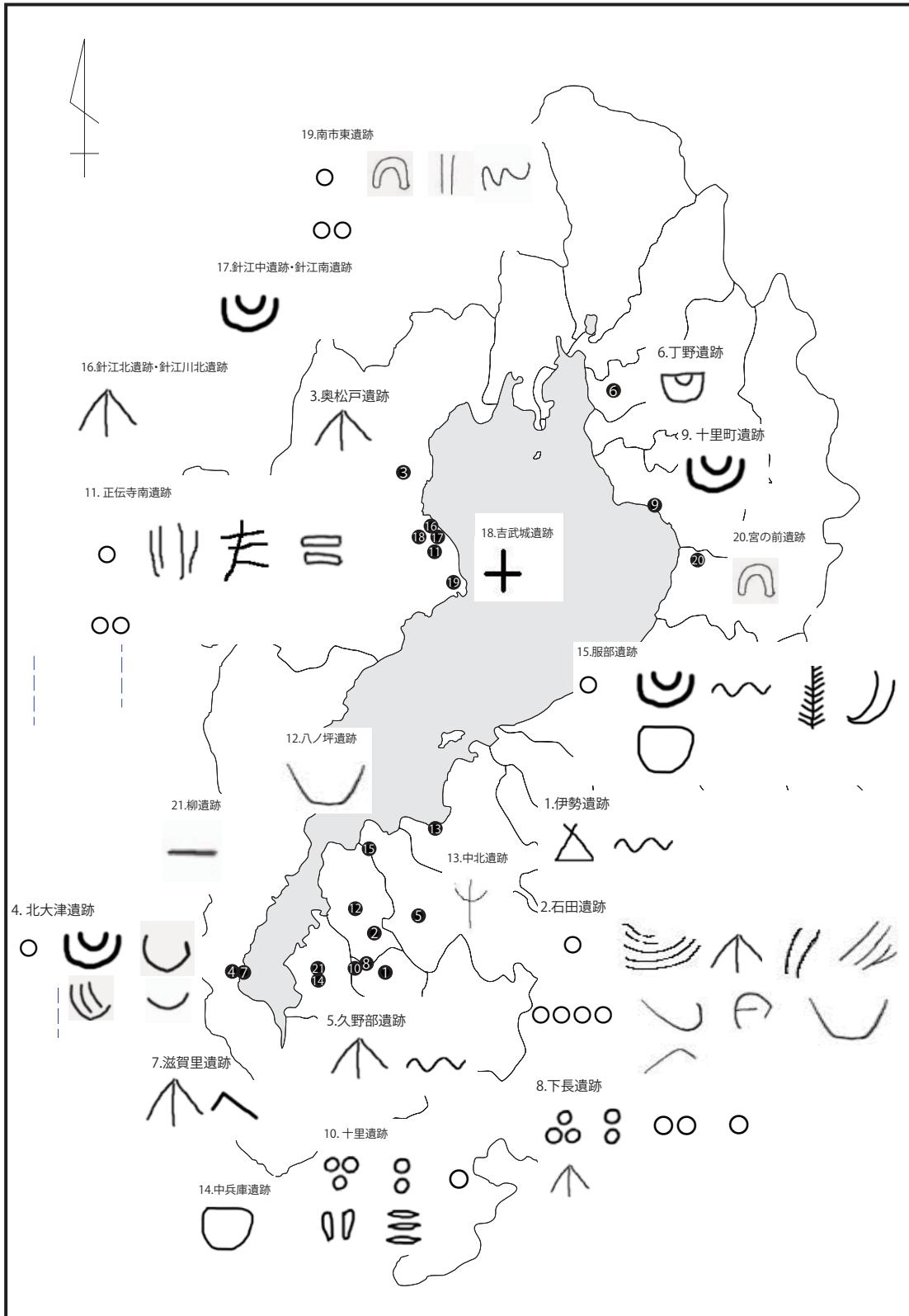


図1 滋賀県出土の土器記号文

遺跡名	時期	出土遺構	器形	施文部位	施文技法	模式図	備考
伊勢遺跡	V-2	竪穴住居SH-1	高杯	すそ部	ヘラ描き	X	五角形住居出土
伊勢遺跡	V-2	竪穴住居SH-1	長頸壺	肩部	ヘラ描き	~~~	五角形住居出土
石田遺跡	V-3	北環濠1・2	広口壺	肩部	竹管	○○○○	
石田遺跡	V-3	北環濠3	直口壺	肩部	竹管	○	
石田遺跡	V-3	北環濠3	広口壺	肩部	ヘラ描き	波線	
石田遺跡	V-3	南環濠	壺	肩部	ヘラ描き	↑	
石田遺跡	V-3	南環濠	直口壺	肩部	ヘラ描き	//	
石田遺跡	V-3	南環濠	直口壺	肩部	ヘラ描き	↙	
石田遺跡	V-3	南環濠	短頸壺	肩部	ヘラ描き	図	
石田遺跡	V-3	南環濠	広口壺	体部上半	ヘラ描き	▽	ヘラ描きで体部上半に連続して施す
石田遺跡	V-3	南環濠	短頸壺	肩部	ヘラ描き	図	大部分が欠損しているため、全体の様子は不明
石田遺跡	V-3	南環濠	短頸壺	肩部	ヘラ描き	図	欠損のため全体の様子は不明
石田遺跡	V-3	中央河道	長頸壺	肩部	ヘラ描き	///	
石田遺跡	V-3	中央河道	短頸壺	肩部	ヘラ描き	↖	
石田遺跡	V-3	中央河道	直頸壺	肩部	ヘラ描き	図	ヘラ描き。端部の二股は頭を表現か？
石田遺跡	V-3	中央河道	短頸壺	体部上半	ヘラ描き	図	
石田遺跡	V-3	中央河道	長頸壺	肩部	ヘラ描き	○	
奥松戸遺跡	V-5～庄内併行	包含層	甕	口縁部外面	ヘラ描き	↑	IV様式から庄内併行期までの遺物が出土している
北大津遺跡	V-3	SD-5 黒褐色土下層	中型広口短頸壺	肩部	竹管	○	
北大津遺跡	V-1～2	溝	長頸壺	頸部	ヘラ押圧	図	円形の組み合わせ
北大津遺跡	V-1～2	溝	長頸壺	頸部	ヘラ描き	U	
北大津遺跡	V-1～2	溝	長頸壺	肩部	ヘラ描き	U	
北大津遺跡	V-1～2	溝	長頸壺	肩部	ヘラ描き	~	半円状に傷をつけ、その後に朱を塗布する
北大津遺跡	V-1～2	溝	直口広口壺	体部上半	ヘラ描き	W	
久野部遺跡	V-3	七ノ坪SD-2	長頸壺	肩部	ヘラ描き	~~~	
久野部遺跡	V	溝	長頸壺	肩部	ヘラ描き	↑	
丁野遺跡	IV-4	包含層	短頸壺	肩部	柳描き	□	
滋賀里遺跡	IV-2	湖西線VIB区 SX-11(方形周溝墓)	短頸壺	肩部	ヘラ描き	↑↑	二つの記号が並列する
下長遺跡	不明	第32調査区 旧河道V層	甕	肩部	押圧+浮紋	○	体部のみ小片。V末～庄内併行
下長遺跡	V-3	SR-1	長頸壺	肩部	ヘラ描き	↑	
下長遺跡	布留	SR-1	二重口縁壺	口縁部	浮紋	○○	
下長遺跡	布留	SR-1	広口壺	体部	ヘラ描き	図	省略された絵画か？
下長遺跡	布留	SR-1	短頸直口壺	口縁部	竹管	○	
下長遺跡	V-2	SR-1	広口長頸壺	頸部	竹管	○	
下長遺跡	V-2	SR-1	長頸壺	肩部	ヘラ描き	↑	
下長遺跡	不明	SR-1	小型壺	体部	ヘラ描き	図	鹿をモチーフにしたもの？
下長遺跡	V-2	SR-1	長頸壺	体部	ヘラ描き	図	7条の直線文
下長遺跡	V-?	SR-1	器台	裾部	円形スカシ	○○	
下長遺跡	V-?	SR-1	器台	裾部	円形スカシ	○○	
十里町遺跡	V-4	SX-4	短頸広口壺	肩部	ヘラ描き	U	
十里町遺跡	V	3号方形周溝墓	短頸広口壺	肩部	ヘラ描き	U	
十里町遺跡	V	2号方形周溝墓	短頸広口壺	体部上半	ヘラ描き	図	絵画土器？
十里遺跡	V	溝52 4層	甕	底部	ヘラ押圧	○○	
十里遺跡	V	溝52	鉢か？	底面	竹管	○	
十里遺跡	庄内	Btr3区井戸160下層	甕	肩部	ヘラ押圧	波線	

表1-1 滋賀県出土の土器記号文

十里遺跡	V-3	Atr3区土坑25	短頸広口壺	頸部	竹管	○○	
十里遺跡	V	Ctr1区溝31	短頸広口壺	口縁部内面	竹管	○	口縁部のみ残存する
十里遺跡	V-3	D3tr土坑108	長頸壺	肩部	竹管	○○	
正伝寺南遺跡	庄内	SD1	二重口縁壺	肩部	ヘラ描き		
正伝寺南遺跡	庄内	庄内	広口壺	体部上半	ヘラ描き	図	
正伝寺南遺跡	庄内	土器群6	甕	肩部	浮文	○	
正伝寺南遺跡	庄内	土器群6	壺	底部外面	ヘラ描き	夫	
正伝寺南遺跡	庄内	土器群7	甕	体部最大径付近	ヘラ押圧	三	
正伝寺南遺跡	不明	試掘	広口壺	口縁部	竹管	○○	
ハノ坪遺跡	ハノ坪遺跡	旧流路SR-1	壺	肩部	ヘラ描き	＼	
中北遺跡	II	土坑SK1	甕	口縁部内面		フ	
中兵庫遺跡	V-3~4	土坑SE04	壺	体部上半	ヘラ描き	図	
中兵庫遺跡	V-3~4	土坑22	長頸壺	肩部		○	
服部遺跡	II-2	SX-112	広口壺	口縁部内面	櫛描き	U	
服部遺跡	IV-2	SD-152A 下層	短頸壺	肩部	ヘラ描き	□	円窓土器と同等の大きさでヘラ描きする
服部遺跡	IV-2	SD-152A 上層	広口壺	頸部	竹管	oooooo oooooo	5×5の正方形に配置する。装飾との区別が難しい
服部遺跡	V-4	SD201 中層	長頸壺	肩部	ヘラ描き	~~~	
服部遺跡	V-4	SD201 中層	長頸壺	肩部	ヘラ描き	ツ	
服部遺跡	V-4	SD201 中層	細頸長頸壺	肩部	竹管	○	竹管文が横一列に9個並ぶ
服部遺跡	V-4	SD201 段位不明	広口直口壺	肩部	竹管	○	竹管文が横一列に3個並ぶ
服部遺跡	V	イ・ロ区包含層	直口壺	肩部	ヘラ描き	フ	
針江北・針江川北遺跡	V	SH-11	長頸壺	肩部	ヘラ描き	図	描き順2画のヘラ描きで表現する
針江北・針江川北遺跡	V	SK-36~44	長頸壺	頸部	朱塗り	図	朱により記号もしくは図案が描かれる。出土位置は不明瞭
針江北・針江川北遺跡	V	SD-29	長頸壺	肩部	ヘラ描き	↑	
針江中遺跡・針江南遺跡	II-2	84-SD-3より北包含層	長頸壺	口縁部内面	櫛描き	U	記号であるのか検討が必要
吉武城遺跡	布留	SD-1下層	鉢か?	底面	ヘラ描き	+	
播磨田東遺跡	V-3	SB-1	直口壺	肩部	ヘラ描き	フ	
南市東遺跡	V-1	大型土坑	長頸壺	肩部	円形浮紋	○	
南市東遺跡	V-3~5	方形周溝墓	長頸壺	肩部	円形浮紋	○○	考古学雑誌67巻掲載
南市東遺跡	V-3~5	方形周溝墓	長頸壺	肩部	円形浮文	○○	考古学雑誌67巻掲載
南市東遺跡	V-3~5	豎穴住居	長頸壺	肩部	貼り付け文	Ⓐ	
南市東遺跡	V-3~5	豎穴住居	直口壺	体部上半	ヘラ描き		
南市東遺跡	V-3~5	豎穴住居	広口壺	体部上半	ヘラ描き	~~	
南市東遺跡	V-3~5	溝	器種不明	施文部位不明	ヘラ描き	八	欠損の為全体の様子は不明
宮の前遺跡	V	溝	長頸壺	肩部	貼り付け文	Ⓐ	
柳遺跡	V-3	SRA01中層	長頸壺	肩部	ヘラ描き	—	北陸地域に多い記号文

表1-2 滋賀県出土の土器記号文

	弥生時代						古墳時代 前期 庄内 布留	
	前期		中期		後期			
	I	II	III	IV	V	庄内		
竪穴住居	0	0	0	0	7	0	0	
溝・河川・環濠	0	0	0	2	37	5	4	
井戸	0	0	0	0	1	0	0	
土坑	0	0	0	0	9	0	0	
包含層	0	1	0	1	2	4	0	
方形周溝墓	0	0	0	1	6	0	0	
不明	0	0	0	1	0	0	0	

表2 出土遺構と時期

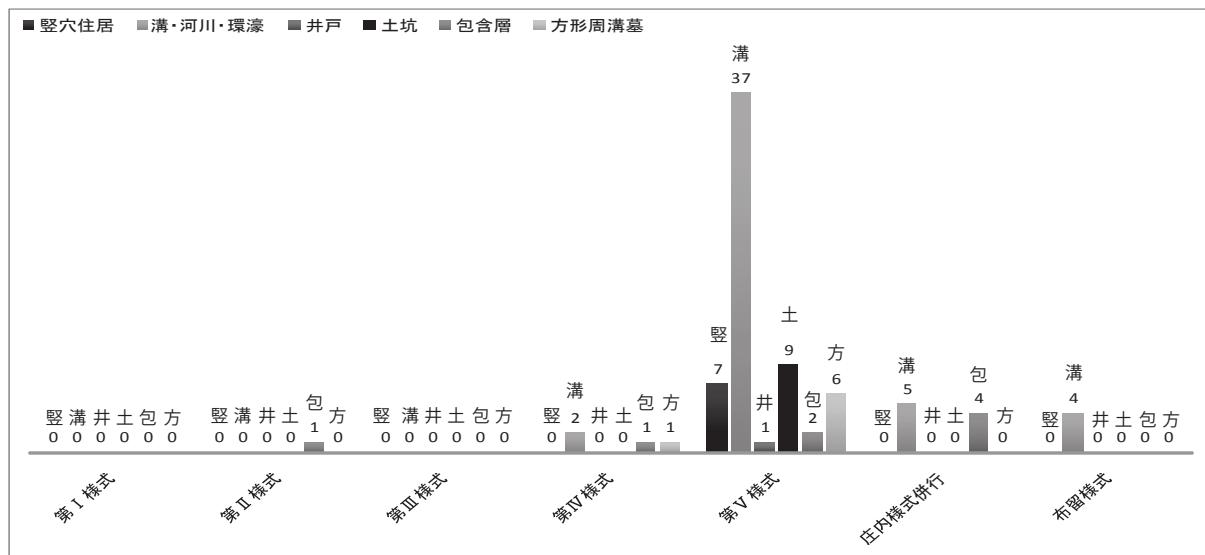


表3 出土遺構と時期グラフ

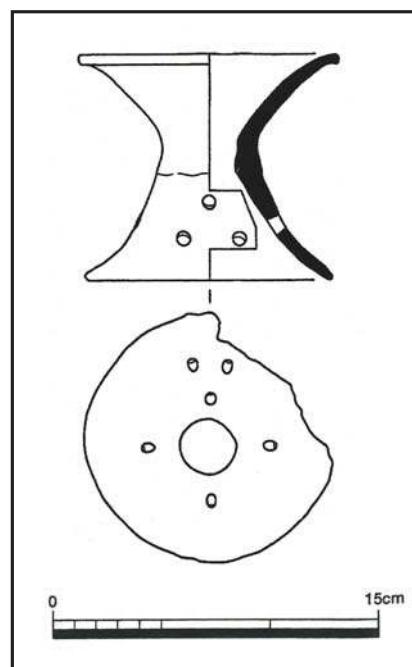


図2 下長遺跡出土器台

—編集後記—

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

(編集担当)

平成21年(2009年)3月

紀要 第22号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)図書同朋舎